

序 ガルシア・マルケスの生涯と作品

誕生、幼少年期、学生時代を経て、作家の天職を意識するまで（一九二七—一九五〇）

二十世紀末まで、ラテンアメリカ文学史上最高の作家ガブリエル・ホセ・ガルシア・マルケスの出生年は一九二八年とされていたが、二〇〇二年刊行の自伝『生きて、語り伝える』で本人自らが記しているとおり（多くの関係者はかなり以前から知っていたが）、出生証明に記載された本当の生年月日は一九二七年三月六日である。一部には、一九二八年にカリブ沿岸の町シエナガで起こったバナナ農園労働者のストライキ（代表作『百年の孤独』にこの事件が象徴的に再現されている）と生誕年を一致させるための操作だったという説も流布したが、実際には、同自伝に示唆されているとおり、一九五五年のヨーロッパ渡航に際し出生証明書を改ざんしてパスポートを取得したというのが真相らし

く、テキサス大学オースティン校に保管されたこのパスポートのコピーには、生年月日が一九二八年三月六日と明記されている。

生誕までの顛末は、（出生年こそやはり一九二八年となつてゐるが）マリオ・バルガス・ジョサが名著『ガルシア・マルケス論——神殺しの物語』（一九七一年）に再現したとおり、コロンビア北部ボリバル県生まれの通信技師ガブリエル・エリヒオ・ガルシアが、同国カリブ海沿岸のマグダレーナ県（ボリバル県に隣接）に位置する小村アラカタカ屈指の名門マルケス・イグアラン家の一人娘ルイサ・サンティアガに恋したところから始まる。二人は一九二六年六月十一日に結婚したが、通信技師の収入は不安定で生活は苦しく、生後間もないガブリエルをルイサの両親に託してアラカタカを離れねばならなかった。残されたガブリエル少年は、一九三六年にアラカタカを離れるまで、母方の祖母、ニコラス・マルケス・イグアランとトランキリーナ・イグアランに育てられることになり、この境遇が後の作家人生を決定づけた。

コロンビアは、一八一九年の独立以来、たえず保守党と自由党の権力・武力闘争に翻弄され続けた国であり、なかでも最大規模の衝突となつたのは、一八九九年から一九〇二年まで続く「千日戦争」だが、ニコラス・マルケスは自由党に与してこの戦闘を生き抜いた退役軍人だった。二十世紀初頭に始まるアラカタカの「バナナ・フィーバー」を尻目に、千日戦争の休戦に際して自由党士官に約束された年金の支給を待ち続けたマルケス大佐は、かつて総司令官ラファエル・ウリベ・ウリベ將軍とともにカリブ地域を転戦した思い出話を初孫に語り聞かせた。バルガス・ジョサが指摘したとおり、後の作家ガルシア・マルケスを支えたのは祖父との「共犯関係」であり、彼の文学作品に現れる数多

の「大佐」は根底で例外なくニコラス・マルケス大佐と繋がっている。他方、祖母トランキリーナは、信心も迷信も深い寛容な女性であり、真実ともお伽噺とも伝説ともつかぬ、幽霊だらけの摩訶不思議な物語を顔色一つ変えることなく孫に話して聞かせた。

カリブ沿岸から少し内陸に入ったマグダレーナ川流域の町アラカタカは、現在でも人口四万人ほどの小さな市であり、二十世紀初頭までは寒村にすぎなかったが、一九〇六年、十九世紀末からラテンアメリカでバナナ農園の開発に乗り出していた多国籍企業ユナイテッド・フルーツの鉄道網がこの地に及んだところから、俄かに好景氣を迎えた。とはいえ、バナナ・フィーバーの栄華は長く続かず、先に触れたシエナガの労働争議がとどめとなってユナイテッド・フルーツは撤退し、ガブリエル少年が両親と一緒に暮らすために町を離れる時点のアラカタカは、もはやノスタルジーにすぎって生きるばかりとなっていた。

最終的に十一人きょうだいとなるガルシア・マルケス一家（父には他に、結婚前の子供が二人、結婚後の婚外子が二人いた）の暮らしはその後も安定せず、ガブリエル少年は、カリブ沿岸の工業都市バランキージャと、そこからマグダレーナ川を遡ったボリバル県スクレを行き来する不安定な生活を余儀なくされた。一時は中学校を休学するなど、勉強もままならない状態に置かれることもあったようだが、そんななかで彼は、少年時代の愛読書『千一夜物語』を皮切りに、『ドン・キホーテ』、『宝島』、『モンテ・クリスト伯』といった世界文学の名作に少しずつ接していった。当時はスクレの薬局店の娘で、後に生涯の伴侶となるメルセデス・バルチャと知り合ったのは、彼が十四歳の頃だったとされている。ようやくガブリエル少年の生活が安定するのは、一九四三年、コロンビア政府の教育振

興策に従って、国の指定する全寮制学校の中等教育を受けることで奨学金を得る制度を利用して以降のことだった。親元、そして慣れ親しんだ亜熱帯地域を離れ、首都ボゴタ近郊の町シパキラに到着した彼を待っていたのは、高地の寒冷な気候と、物静かで服装も地味な人々に囲まれた生活であり、少年は陽気なカリブの生活をいつも懐かしがった。だが、ようやく本格的に勉強と読書に取り組むことができるようになったのも事実であり、成績も優秀だったばかりか、この頃から、学校の新聞や同人誌に詩などを寄稿するようになっていく。

一九四七年、ガルシア・マルケスは首都のボゴタ国立大学に進学し、文系の花形だった法学を専攻するものの、授業がどうしても好きになれず、下宿先に近いカフェなどで時間を潰す怠惰な日々を送った。この時代からの親友プリニオ・アブレヨ・メンドーサは、当時の彼を振り返って、派手な服をぞんざいに着るばかりか、仲間にもウエイトレスにも軽口を叩く、いかにもカリブ海地域出身という印象の男だったと語っている。フランス・カフカを読んだことで現代小説に開眼したのはこの頃であり、一九四七年九月、十月、そして一九四八年一月、コロンビアの有力新聞『エル・エスペクタドル』に三作の短編小説、『三度目の諦め』、『エバは猫のなか』、『トゥバル・カインが星を作る』を立て続けに発表している。

大学の授業を怠けながらもこうして次第に安定し始めた首都生活は、「ボゴタ動乱」と呼ばれる政治的事件によって突如中断する。一九五〇年に予定されていた大統領選挙に向けて、貧困層の強い支持を集めていたカリスマ的弁護士ホルヘ・エリエール・ガイタンが自由党の有力候補として頭角を現す事態を前に、保守党支持者は危機感を覚え、しばらく沈静化していた両党の対立が再燃したのだ。

一九四八年四月九日、ガイタンは事務所から人通りの多い七番街へ出たところで暗殺され、保守党の陰謀を主張する（真相は不明）自由党員が報復に乗り出したことで、両派の殺戮合戦が始まった。事件現場のすぐ近くに住んでいたガルシア・マルケスは、この数日の激動を後々まで生々しく記憶しており、『生きて、語り伝える』にも、命からがら首都を離れてバランキージャに逃れる様子が克明に再現されている。

青年となってカリブ地域に戻ったガルシア・マルケスは、一九四八年五月、かつてスペイン植民地の玄関口だった伝統の港町カルタヘナ・デ・インディアスの新聞『エル・ウニベルサル』のコラムニストに抜擢され、後々まで彼の重要な食いつ持となるジャーナリズムに取り組んだ。翌年にはバランキージャに拠点を移し、現地の新聞『エル・エラルド』で「キリン」というタイトルのコラムを担当し始めるが、ここで彼の人生を大きく左右する仲間たち、通称「バランキージャ・グループ」と出会うことになる。アルバロ・セペダ・サムーディオ、アルフォンソ・フエンマジョール、ヘルマン・バルガスという三人の若き作家志望に、指南役を担った「カタルーニャの賢者」ことラモン・ビニエスを加えた四人であり、彼らに刺激されて、ウイリアム・フォークナー、アーネスト・ヘミングウェイ、ヴァージニア・ウルフといった作家を熱心に読み耽ったガルシア・マルケスは、以前にまして真剣に文学と向き合うようになった。このグループは、『百年の孤独』の後半でアウレリアーノ・バビロニアと激論を交わす若者たちのモデルとなったほか、刊行前後から『百年の孤独』の成功にも一役買うことになる。

そして一九五〇年二月十八日、ガルシア・マルケスを作家の道へと踏み出させる決定的な事件が起

こった。売春婦に囲まれて暮らしていた下宿先に突如母が現れ、故郷アラカタカに残された生家を処分するので一緒に来るよう厳命したのだ。母と連れ立って故郷へ戻ってみると、そこに少年時代を過ごしたアラカタカの面影はなく、すっかり「ゴーストタウン」と化した町で旧知の女性と出会った母は、そのままさめざめと泣き出した。バルガス・ジョサが「悪魔」と呼んだ、創作の源泉となる衝動がガルシア・マルケスの内側に居座ったのはこの瞬間であり、「この逸話に至るまでの過去をすべて書いてみたい」という思いが、この後彼の頭にとりついて離れなくなる。つまり、これが作家としての出発点だったのだ。バルガス・ジョサの指摘を意識していたのかは不明だが、ガルシア・マルケスはこの逸話を『生きて、語り伝える』の冒頭で詳しく再現しており、彼自身にとってもこれが人生の一大事件だったことが窺える。

カリブからボゴタ、ヨーロッパへ——ジャーナリズムと創作の間で（一九五〇—一九六五）

一九五〇年までに十作ほどの短編小説を新聞雑誌に掲載していたガルシア・マルケスは、アラカタカ再訪を機に自らの天職を自覚したことで、長編小説の執筆を思い立つが、一家の過去をすべて盛り込む大作を書くにはまだ技量が足りないことも十分意識していた。そこで取り組んだのが、かねてから強く興味を引かれていたウルフ流の〈意識の流れ〉を応用した習作だったが、その結果、彼はいきなり出鼻を挫かれることになる。バナナ農園労働者集団の蔑称に因んで『落葉』と名付けられたこの小説は、一九五一年に書き上げられ、盟友アルバロ・ムティスの取り計らいで、アルゼンチンの名門

ロサダ社の代理人に託されたものの、彼のもとに戻ってきたのは、スペイン出身の文学評論家ギジェルモ・デ・トーレ（ホルヘ・ルイス・ボルヘスの義弟）による「あなたには文才がないから他の仕事をお探さない」という酷評を添えた不採用通知だったと言われている。

失意のガルシア・マルケスは、一時カリブ沿岸地域における百科事典の訪問販売などで生計を立てた時期があったようだが、一九五四年、またもやムティスの仲介で『エル・エスペクタドル』に職を得て再び首都ボゴタに移り、ここから少しずつ彼の運氣は好転していく。コラム「ボゴタの映画、今週の封切」を担当したほか、コロンビア各地へ事件の取材に赴き、同紙にルポルタージュなどの記事を寄稿することもあった。同年八月には、短編小説「土曜日の次の日」で作家芸術家協会賞を受賞し、一部の文学関係者から評価を受けている。ジャーナリストとしてガルシア・マルケスの知名度が上がるきっかけとなったのは、カリブ海で十日間漂流した末に生き延びた船員をめぐるルポルタージュであり、後に『ある遭難者の物語』というタイトルで刊行される（一九七〇年）この十四回の連載記事は、コロンビア全土で大評判をとった。

同じ一九五五年七月、彼は『エル・エスペクタドル』の特派員としてジュネーヴに派遣され、短期の予定だった滞在が伸びに伸びて、一九六一年六月にメキシコシティに落ち着くまで、ヨーロッパとアメリカ大陸の各地を転々と移動し続けることになる。G4会議の取材を経て、ローマ法王容態悪化の知らせとともにローマに到着したところから、高給（一説には月給三百ドル）を保障されて悠々自適の生活に入り、「映画実験センター」で数カ月学んだ後、十月には隠密裏にポーランドとハンガリーを旅行した。年末には、ボゴタ時代の親友プリニオ・アプレヨを頼ってパリへ移るが、ここで思

わぬ事態に見舞われる。一九五三年に無血クーデターで政権を奪取していた軍人政治家グスタボ・ロハス・ピニージャが、一九五五年半ばから権威主義的傾向を強め、反対派弾圧の一環として『エル・エスペクタドル』を休刊に追いやったのだ。収入を断たれたガルシア・マルケスは、一九五六年始から安宿の屋根裏部屋へ移り住み、パリに亡命中のラテンアメリカ人たちと助け合いながら、友人知人の回してくれる仕事などで糊口を凌ぐ生活を送った。中傷のビラをテーマとした長編小説『悪い時』に取り組み始めたのはこの頃であり、執筆作業は難航したものの、この作品から分岐した中編『大佐に手紙は来ない』が同年末に完成し、一九五八年五月、コロンビアの名門文芸雑誌『ミト』に掲載されている。極貧の暮らしとはいえ、あれこれ気晴らしには事欠かなかったようで、一九五六年後半にはスペインの女優マリア・コンセプション・キンタナと逢瀬を交わし、一九五七年六月から九月までは、プリニオとともに東欧諸国とソ連を旅して回った。この時に書いた旅行記は、一九五九年、ボゴタの有力雑誌『クロモス』に、「鉄のカーテンの九十日」というタイトルで連載されている。

一九五七年十一月に一時ロンドンに滞在した後、またもやプリニオの紹介でベネズエラの雑誌『モメント』に記者の職を得たガルシア・マルケスは、これを機に二年余りのヨーロッパ滞在を切り上げることになるが、その後の四年間は、彼の人生で公私ともに最も慌ただしい期間だったと言えるだろう。同年十二月二十三日にカラカスへ移ると、翌年一月二十一日にベレス・ヒメネス独裁政権が崩壊して取材に追われ、休む間もなく三月にはバランキージャへ移動、かなり前から許嫁も同然になっていたメルセデスと結婚した。ようやく落ち着いた夫婦生活が始まったかと思えば、『モメント』の首脳部と対立してプリニオとともに辞職、またもや固定収入を失って、低俗な大衆雑誌に記事を書くな

どして生計を立てねばならなくなった。一九五九年一月、キューバ革命が勃発すると、革命政府にスカウトされてキューバの通信社ブレンサ・ラティーナに加わり、様々な歴史的場面を目撃した後、四月には同社のボゴタ支部開設を任されて、またもやプリニオとともにボゴタへ舞い戻った。そんななかで八月二十四日に長男ロドリゴが誕生するが、ゆっくり赤ん坊の相手もできぬまま、一九六〇年には何度もボゴタとハバナを往復し、年末にはブレンサ・ラティーナの創始者リカルド・マセッティとともにメキシコ、グアテマラ、ペルーを歴訪した。年末をバランキージャで過ごした後、翌年一月からはブレンサ・ラティーナのニューヨーク支部へ転勤を命じられ、ロックフェラー・センター・ビルの一角にある「わびしくみすばらしいオフィスで」、いつも手の届く位置に鉄パイプを置きながら危険な任務に約半年耐えたものの、通信社の内紛を受けて、六月には退社を余儀なくされた。妻子とともに、尊敬する作家フォークナーの文学的舞台だったアメリカ合衆国南部を数週間かけてバスで回った後、ラレドから国境を越えてメキシコ側のヌエボ・ラレドに到着したところで、メルセデスが「黄色く柔らかない御飯」の味に感動し、この国にとどまることを決める。本当に本人の証言どおり「最後の二十ドルと何のあてもない未来」以外何も手元になかったのかどうかは定かでないが、一家がメキシコシティに到着したのは一九六一年六月末のこと（本人の証言では七月二日）、慌ただしい旅路の締めくくりとばかり、直後に旧知のメキシコ人作家ファン・ガルシア・ポンセから、敬愛する作家ヘミングウェイ自殺のニュースを知らされた。サン・アンヘル・インに居を構えた後も、しばらくは生活が落ち着かなかったようだが、一九五六年からメキシコに移住していた盟友アルバロ・ムティスが庇護役となり、彼の仲介でメキシコ文学界のホープと目されていたカルロス・フエンテスと友情を

結んだことが後々まで重要な支えとなった。

せわしなく移動を続ける間もガルシア・マルケスは、一九六〇年一月にコロンビアの有力新聞『エル・テイエンポ』に「火曜日の昼寝」を掲載する（挿絵を担当したのは後に世界的画家となるフェルナンド・ボテロ）など、定期的に短編小説を書き続け、『悪い時』の草稿もこの頃に書き上げたようだ。とはいえ、一九六二年にフエンテスの主宰する『メキシコ文学雑誌』に短編「失われた時の海」、同年四月にベラクルス大学出版局から短編集『ママ・グランデの葬儀』を発表して以降は、一九六五年に『百年の孤独』の執筆に着手するまで、物語文学の分野で新作に取り組むことはない。その大きな要因となったのが、『生きて、語り伝える』でも詳しく再現されたエッソ文学賞をめぐる一連の騒動だった。広告業界と太いパイプを持つムティスの肝煎りで、コロンビア言語アカデミーと石油会社エッソ・コロンビアの共催により、一九六一年にこの賞が創設されると、ムティスを筆頭とする友人たちの強い後押しを受けたガルシア・マルケスは、『悪い時』の草稿を応募作として送り、見事大賞を射止めた。ところが、副賞としてスペインで印刷・刊行された版は、誤植だらけのうえ、コロンビアの方言がすべてマドリード風の言い回しに無断で修正されていた。さらに、審査員に高く評価されたとはいえ、納得のいかない状態で原稿を出してしまった後味の悪さが後々まで彼につきまとい、改めて小説を読み返して、自分の力不足を痛感したようだ。いずれにしても、生活苦に喘いでいたうえ、一九六二年四月十六日に次男ゴンサロを授かったガルシア・マルケスにとって、三千ドルという賞金が大きな救いとなったことは間違いない。この時購入した愛車オペルは、彼の行動範囲を飛躍的に広げたばかりか、後に『百年の孤独』に向けたインスピレーションを得る舞台にもなった。

その後数年間の生活は、まさに行き当たりばったりと言っていいだろう。女性雑誌やゴシップ雑誌に匿名記事を寄せるかと思えば、ムティイスの紹介で広告代理店の仕事を始め、後には映画業界で一山当てようと目論むこともあった。フエンテスと組んで映画のシナリオ執筆に乗り出した際には、自ら『死の時』のストーリーを考案し、続けてフアン・ルルフォの短編を下敷きにした『黄金の鶏』の映像化にも知恵を絞ったが、どちらも商業的成功とは程遠く、さらに、ルルフォの名作『ペドロ・パラモ』の映画版制作に関わったことで、「メキシコ映画史上に残る失敗作」に立ち会うことになった。小説家ガルシア・マルケスにとって命綱となったのは、一九六一年にコロンビアで単行本として刊行されていた『大佐に手紙は来ない』に寄せられた高評価だった。エッセ文学賞受賞を機にガルシア・マルケスに目をつけたバルセロナの敏腕代理人カルメン・バルセルスがこの佳作の売り込みを買って出たことで、一九六三年にはエラ社によるメキシコ版とパリのジュリアール社によるフランス語版が相次いで刊行されたばかりか、一九六五年には英語版の刊行に向けた契約まで成立している。バルセルスと彼がメキシコシティで実際に顔を合わせたのは同年七月のことであり、当時持て囃されていたメキシコ人作家ビセンテ・レニエロらを変えて行われたカクテルパーティーや夕食会が、ガルシア・マルケスを再び創作へと押しやる大きな刺激となった。

そして同じ一九六五年七月、アカプルコに向けて愛車オペルを走らせていたところで、現在まで「公現」の名でラテンアメリカ文学界に知られる伝説的事件が起こる。